

備陽史探訪

記念65号

発行

備陽史探訪の会

福山市多治米町5-19-8

TEL(0849)53-6157

「備陽史探訪の会」創立十五周年を迎えるにあたって

名誉会長 神谷和孝

数回にわたって、「備陽史探訪の会」十五周年を祝ってどのような行事をするかの役員会が開かれ、具体的な内容が決まってくるに従って、私の胸の中にある感激と言うか、喜びと表現すべきか、ある感慨が次第に大きくなっていくのをおさえることが出来ませんでした。その思いは恐らく私だけの思いではなく、田口会長をはじめ当会の創立期から、志をとともに会を育ててきた人、初めからでなくとも、途中から入会し、会の発展のためには努力を惜しまなかった方々は、私と思いは同じではないかと思えます。

創立十周年の記念行事を考える時のあの感激を今も忘れることが出来ません。発会以来、色々の苦勞をして、やっと会がここまで大きくなってきたのだから、その喜びを精一杯にあらわせる行事を組んでみたい。当時会長をしていた私の願いを役員

の方々は快く許して呉れました。当時の役員の方々の思いも、私と一緒にだったと思います。

今回、十五周年を迎えて、どのような記念行事を組もうかと考えている田口会長の胸中には、五年前の私と同じように、熱い思いあることと推察しております。

十周年記念行事の記録があります。それを読み返すにつけ十周年記念行事のあれやこれやが懐かしく思い出されてきます。

記念講演には、当時注目を浴びていた佐賀の吉野ヶ里遺跡の高島忠平先生に来てもらうため、二度も吉野ヶ里遺跡に足を運んで直接にお願いして、やっと実現し、あの広島県立歴史博物館の地下の講堂に座り切れない程の人が講演を聴きに来て下さったことは一生忘れられないと思えます。

会員が協力しあってコツコツと会

の運動を積みあげてきたからこそ会が前向きに動いて十五周年を迎えられたのだから、十五周年を祝う行事は精一杯盛大にやって、節目をハッキリとして、更に二十年、三十年を目指して羽ばたいていけばいいと思っております。

私は十周年の行事を済ませたら会長の座を田口副会長(当時)に譲ろうと心ひそかに期するものがありました。

十周年を迎えた時、会員は百五十名を数え、会そのものが大きな飛躍をしなければいけない時期を迎えていました。大きな飛躍には会そのものが、今までのように調査されたところを探訪することから、自らが調査をする力を持つことであり、そのことに応えるには、地方史に無知な私ではどうすることも出来ないことと感じていたからです。むしろ百五十名に近い会員の方が私ごときものが会長をしていて、よくついて来て下さると感謝していました。創立以来十年間、陰になり日なたになり私を支えて会の発展のため努力を惜しまない田口氏に創立十周年以後の会を託すことは当然のことと思っております。

ただ会長の交替にあたって、①今まで育てて来た会の原点は大切にす

ること、②十五周年を迎えるころには会員が二百人を超えるような会に成長して欲しい、と言う希望を会長に伝えておきました。

田口会長になつてから備陽史探訪の会は大きく変貌をとげたと思えます。自分の研究テーマを持った会員の方が増し、城郭部会も、古墳部会も活発な活動が見られ、古墳部会は今までの「親子の古墳めぐり」をベースにして「古墳探訪」を物にし、城郭部会も十五周年記念に合わせて「山城探訪」を発行するにいたり、「備陽史探訪の会」ここにありとの威勢を福山をはじめ周辺の地に示した感があり、十五周年の今年、会員数は二百五十名を数えるところまで発展してきました。会長が私との約束をキチンと果たして下さったことに対して感謝の思いで一杯です。

十五周年の記念行事を契機として更に会が躍進していくことを祈らずにはおられません。

私は会を発会させて以来、会の最も大切にしなければならぬ柱を「草莽の志」だと思ってきました。草莽とは民間と言う意味で、その点を貫いていく限り、備陽史探訪の会は誰かの言葉ではありませんが「不滅」と信じております。

備後杉原氏の盛衰

会長 田口義之

(杉原氏の登場)

杉原氏は、系図によると平氏の出で、鎌倉時代の建仁二年(一一二〇)伯耆守光平が備後守護職に任ぜられ、府中八尾城に来住したのが起こりと伝える。

杉原氏が本格的に歴史の舞台に登場するのは、南北朝時代である。

「光明寺残篇」によると杉原氏は当初幕府方に味方したようで、元弘元年(一一三二)九月二十八日、備中の陶山・小宮山氏と共に笠置山に夜討ちをかけ、これを攻め落としたりしたという。

光平の裔である杉原氏の惣領家は、歴代府中市街地の北に聳える八尾山城を居城とし、主に国衙を拠点に勢力を伸ばした。「浄土寺文書」によると、八代光房は当時の備後守護と肩を並べて足利幕府の使節として活躍しているが、その理由は杉原氏惣領家の勢力基盤が国衙にあったためと考えられる。

南北朝の内乱の一つの特色は、足利幕府の内部分裂にある。特に尊氏・直義兄弟が幕府の掌握を巡って争った「観応の擾乱」は全国に深刻な影

響を与えた。杉原氏もこの擾乱では

二つに分裂し、互いに覇を競っている。惣領家の光房は直義・直冬の際にあったのに対し、終始尊氏方にたつて勢力を大いに伸ばしたのは、庶流の信平・為平兄弟であった。

信平兄弟は、光平の子員平の四男真観の子孫にあたり、建武三年(一一三六)の尊氏の西走に従軍し、有名な筑前多々良浜の合戦で大功を立て、同年五月二十日、木梨庄地頭職を与えられ、庄内に鷲尾山城を築いて木梨流(木梨・高須・山手)の祖となった人物である。

(室町期の杉原氏)

後に戦国大名として雄飛する小早川氏が室町時代、幕府奉公衆として京都で活躍したことはよく知られているが、杉原氏もまた多くの奉公衆を出した家である。

杉原氏一族が中央で活躍するのは意外に早く、康永三年(一一三四)三月には、惣領の光房は、幕府五番引付衆として名を連ね、また同年に設置されたと推定される「三方制内談」の一員となっている。

この杉原氏惣領家が後の幕府奉公衆にあたる將軍近習として史上に現れるのは、応安八年(一一三五)三月のことで、「花營三代記」同月二

十九日の条に將軍義満の近習として光房の子直光の名がある。以後、惣領家の満平・光親(満平の子)・親宗の名が將軍近習、或いは奉公衆の一員として見え、明応初年(一一四九二頃)の將軍義種の時代に及んでい(東山時代大名外様付等)。

この時期の杉原一族の全貌を示す史料は見当たらないが、奉公衆となつた家については幸い康正二年(一一四五六)の段銭京濟者の名簿が残っており、その概要を知ることができる。「康正二年造内裏段銭并国役引付」参貫文(略) 杉原新蔵人殿

備後国草原村段銭

九貫六百元(略) 杉原美濃守殿

備後国父木野四カ所分段銭

六貫五七九文(略) 杉原因幡守殿

備後国信敷名立職段銭

十二貫三七五文(略) 杉原彦四郎殿

備後国木梨庄段銭

八貫二八五文(略) 杉原千代松丸殿

備後国三原浦并高須口分

五貫文(略) 杉原左京亮殿

備後国杉原本庄段銭

(杉原一族の興亡)

備後国人衆の雄として名を馳せた杉原一族であるが、戦国の荒波は厳しく、近世まで生き延び得た者はごく僅かであり、ましてや大名の座を

獲得し得た者は一人もいない。

杉原氏一門の中で一番浮沈の激しかったのは、木梨杉原氏である。同氏は、明応から永正初年の争乱で、前將軍義種の京都復帰に協力し、一時その所領を闕所にされたこともあったが、この事件は義種の將軍復職で一応収まったかに見える。しかし、木梨杉原氏は永正末年から大永年間にかけて出雲の尼子氏の勢力が伸びて来ると同氏に應じ、尼子氏のライバル周防の大内氏の攻撃を受け、一時その居城を占拠されてしまう。すなわち、大永六年(一一五二)末、尼子氏に應じた木梨杉原氏は東隣高須の高須杉原氏を攻め、大内方諸氏の反撃を受け、本拠の鷲尾山城を大内勢力によつて攻め落とされているのである(「閩閩録」四)。

まもなく、木梨杉原氏はその居城を回復しようであるが、その後も同氏の受難は続く。「木梨先祖由来書」によると、その後大内方となつた木梨杉原氏は今度は尼子氏の攻撃を受け落城の非運に見舞われる。天文十二年(一一四三)六月のことである。また、同書によると、木梨杉原氏は近隣の国人衆の攻撃にもさらされてきたようで、年代は伝わっていないが、木梨庄の西、三原市深町

医王山城主石原氏は木梨杉原氏と不和に及び、不意打ちによって鷲尾山城を奪い、木梨杉原氏は五年にわたって逼塞を余儀なくされたという。なお、ここに言う石原氏は、証如上人の『天文日記』によると「武衛一の仁」とあり、三原市八幡町の渋川氏家中の最有力者であった。おそらく、渋川氏の衰退と共に独立性を高めこの拳に及んだのであろう。

一方その庶流に当たたる高須杉原氏は、戦国初期以来八幡の渋川氏の旗下に属していたが、天文年間渋川氏が毛利氏の保護下に入ると共に同氏も毛利氏の支配下に入り、次第にその家臣としての性格を強めて行く。

木梨杉原氏もこうした周辺諸族の動向に屈したのであろう、天文末年には元就の三男で小早川家を継いだ隆景と義兄弟の契約を結び、その傘下に入っている(『関閩録』五三・六七)。しかし、高須杉原氏と強い強大な力をもっていた木梨杉原氏は、権力を確立しつつあった毛利氏の忌むところとなり、天正十九年(一五九一)の「惣国検地」を機会に本領を没収され、他国に移されてしまう(『関閩録』など)。

杉原氏一族の中で、最も勇名を馳せたのは理興と盛重であらう。

理興は、惣領家の八尾杉原氏の出身と推定され、天文七年(一五三八)

七月、大内氏の支援を受けて神辺城主となり、一時は備南の覇者として勢力を振るった。しかし、天文十二年(一五四三)には尼子氏に応じ、これが彼の運命を狂わせた。理興は同年小早川氏領内の椋梨にまで侵入するが、やがて大内毛利方の反撃を受け、天文一八年(一五四九)九月には城を捨てて出雲に走った。この戦いが小早川氏を継いだ隆景の初陣となったことはよく知られている。

理興はその後許されて神辺城に復帰するが、まもなく死去し、その跡を相続したのが盛重である。盛重は為平の裔である山手杉原氏の出身で、直良という兄があったが、吉川元春にその武勇を愛され、理興亡き後その跡を継いで神辺城主となったものである。そのため盛重は元春の配下として主に山陰方面で活躍し、後には伯耆尾高城主として同方面の毛利方最高司令官の役目を担っている。

理興・盛重あるいは木梨・高須の杉原氏については、まだまだ語るべきことが多い。しかし、それはまた別の機会に譲るとして、今回はこの辺で筆を置くこととする。

今高野山例会報告

—四月一六日実施— 事務局報告

久方振りに会長が担当する例会とあって申し込みが多く、参加できない方が何人も出たことをまずお詫びします。そのうちの熱心な方は、絶対行くもんね、とばかり自家用車三台での追跡行となりました。

定刻に福山駅出発。バスは最初の目的地、八田原ダムへ。昔の県道がまだ見えますが、近い将来水没。これが最後の見納めでしょうか。

下津屋十二坊は神社社殿と楼門など栄華のあとが微かに残るだけ。芭蕉なら何と吟ずるのでしょうか。現地吉岡先生をはじめとする地元の方と合流しました。

尾首城跡はこじんまりとしていますが、主郭、帯曲輪などの遺構が明確に残って山城を勉強するのにとてもよい。それとしても、これくらいの規模の城でこの地を守っていたのは少々心もとない気がしました。

いよいよ今高野山へ。駐車場で蔵橋先生が笑顔で出迎えて下さり、会員も感謝感激です。

さっそく境内へ案内していただきました。参道に残る多くの坊跡。往時の勢いが偲ばれます。そんな中ほんの小さな鳥居に注目。備後ではま

ず見ない、笠木の先端の形と転びのないのが特徴の肥前鳥居です。

本堂などの建築にも感動しました。蔵橋先生のお力添えと、ご住職のご配慮により、御本尊の十一面観音を拝観できたときの興奮はなんと表現すればよいのでしょうか。S氏とH氏はマスクをしながら感涙を流しておられました。え、花粉症? あんまり深く追及しなさんな。

弁当はみんなでおかずを分けあい、和気あいあいと食べるのがわが備陽史探訪の会の定法。おかずの取り合いにならないのがスゴイところ。

午後から、万福寺廃寺跡周辺の石造物を見て歩きました。見事な宝篋印塔、五輪塔、板碑がそこらじゅうにあります。ブッシュを掻き分け進んだ先に石造十三重の塔が現れたときは思わず歓声があがりました。

最後に康徳廃寺と康徳寺古墳を見学。廃寺はいま神社の境内になつていますが、遺構がほとんどありません。古墳は立派な横穴式石室を持っており、暗闇の中でキャーキャー叫ぶ人、これあり(ジェームス三木)。蔵橋先生、吉岡先生どうもありがとうございました。

田口会長ゴクローサマ、いつかたくさんお饅頭を買ってあげるからネ。

穏やかな旅人

佐藤秀子

画家が書く文章は絵画とは表現方法が違っても、感性と情感に溢れている。東山魁夷や加山又造の文は、絵そのもののように静謐、絢爛。骨董商や画商も又、芸術家と同じ眼をもっていて、その文は、やわらかくやさしい。

州之内徹は田村泰次郎の後の現代画廊を引きついだ画商で、丸亀に縁がある。私の住んでいた町の近くにある教会が徹の従兄の家で、そこに長期に亘って滞在していたらしいのだ。少し奥まった場所にあるその教会を訪ねてみた。

家人は留守で会えなかったが、自分の好きな人がすぐ近くに住んでいた：奇妙な親近感を覚え、私は建物の回りを何度も歩いた。彼の文には辻潤だとか、有島武郎の従兄、宮田自転車（日本初の自転車の製作会社）の創業者の息子だとか、わっと思う人が登場する。早世した画家や埋もれていた画家、他の画商がふりむかない彼らの絵を探して全国を巡り、行く先々で知りあった人達のことを書いた著作他六冊の本は、私の心の中に次々と居場所を広げていった。

文の間に漂う情感や、おだやかな

文体は読んでいてほっとするし、知らない土地の情景さえ、描写で眼前に、はつきりとみえてくるのだ。

療養所に入院していた叔父は、文学青年。二十六才で亡くなったが、高山樗牛の「瀧口入道」―処女作であり、出世作であり、代表作であり、唯一の小説である―を暗唱してよく聞かせてくれた。まだ六才くらいだった私は叔父のひざにもたれて日のあたる窓際で、低い声を夢うつつに聞いていた。

中学生になった頃、私はこの作者を紹介した一文を読んで、三十二才で亡くなったことを知った。叔父は樗牛に自分の身の上を重ね合わせていたのだろうか。もう少し私が大人であったなら、色々な話を聞けただろうし、なぐさめてもあげられたのにと唇をかんだ。

通勤途中でいつも会う自転車の叔父さんやバス停でいっしょに降りる人、仕事に行き始めて知り合った人も又、不思議な縁である。たつた一分くらいいっしょに乗らないエレベーターの中で日焼けした配達人の人生にふれる。勤務先のエレベーターの中でよく合う長髪の三十代のその男の人は「夢も希望も生きているしみも何もない」と言う。

「独身ですか」

「いや、ガキが二人いる」
私は返す言葉がない。

「本、読みますか」

「うん」

「貸してあげましょうか」

「面倒くさい」

五階で降りる私は「じゃ又こんど」と。犬や馬のかなし眼をみていると、言葉が喋れる人間が幸せかどうか考えこんでしまう。彼らが訴えているまなざしは、もの言えない分、痛切だ。

国宝の頼朝の肖像画の口元が夢窓国師に似ているとか、最近興味ある本がたくさん出ていて、いまは平凡社の本を読んでいる最中。私は、頼朝像がたとえ彼ではなくても、あの気品あるまなざしだけは、誰にも負けない確たる信念と大望を持った男にしか持てないものだ、何度みてもため息をついてしまうのだ。

口は言葉が発するだけで機械的だ。けれど眼は違う。まなざしは唯一、心をあらわすもの。夜更けにぼんやりと考え事をしている時、仏像のよくなやさしいまなざしのさよ子さんや、すでに人生の奥義をきわめて、キラリと光るまなざしの熊谷さんや、今年も山桜を観にいったのだから少しはにかんだまなざしの山口さんや、娘が十才以上も若くみえるねと

言う真味溢れる平田さんのまなざしや：次から次へと浮かんできて、きょうも午前二時過ぎ。知りあえたことに深謝いたします。

先日、韓国の政治犯だった人の本を読んだ。その本のわずか三行に描かれた男の人に、私は恋をしてしまった。いま立命館の講師になっている著者は、十九年間の獄中生活で知りあった同志の最後の朝を、感情を交えないで淡々と、彼の家族に知らせるために記録したのだ。

水点下の気温になるのに、官給の服だけで、下着も持っていない彼の為に、著者は母からの差入れの下着をあげたのだが、死刑台に向かう彼が扉の前を通る時に（以下本文）

彼はニッコリ笑って囚人服を持ちあげてみせた。真白い歯と濃い眉と澄んだ眼、やせた長身をかかめて、じつとこちらを見つめていった。三十四才。

私は眼前の本の字が、ぼんやりかすんでゆくのを感じながら、あわてて涙をぬぐった。

一人しか会員のいない、ぼんやり同好会は、朦朧体の絵を工夫した大観と菱草のように、もの言わずとも通じる仲間を募集して、午前四時すぎ……。夜が白み始めたようだ。

墓碑建立に想ひ

橋高秀樹

私事で恐縮ですが、厳しかつた父の十三回忌を一年後に控えた昨年十月、何とか漸くにして建立を果たした「お墓」について、若輩ながらその経緯を披露いたします。

建墓に際して、先ず規模も含めて形状(外觀)を決めなくてはなりません。常日頃より石材店の新聞広告を集め、専門書を読んだり、近所の墓地を見学して、最近の一般的なスタイル(型)についてはそれなりに認識を深めたつもりでしたが、現実問題となると、なかなか決心できかねるものだと痛感しました。

父の他界後、どういう訳か、ごく自然と自らの先祖や追善供養を始めとする仏事に関心を持つようになり我が家の墓石の調査に取りかかると共に、種々の疑問が湧出するに従い次第に興味の対象は先祖解明へと移行し、菩提寺の玄洞山廣山寺や中条八幡神社へ幾度か足を運び、実地踏査の範囲も中条地区全域の庄屋・組頭・郷士(帰農)及び山城主級の墓碑へと拡大していきましました。

我が家においても、農村の旧家と同様、代々夫婦単位の墓(比翼塚)が建てられており、墓苑にも比較的

に余裕があるため、当然いわゆる夫婦墓を踏襲することとしましたが、母は健在であり、逆修戒名を檀那の廣山寺の院家から授与、幟と共にいただきましたが、選字についても夫婦の相似法号とも言うべくバランスのとれた清字であり、檀家の立場として納得でき、感謝する次第です。

次に、我家に現存する元禄期からの墓碑の特徴については、当然ながら時の経過と共に、より装飾的に、より壮大に変化しておりますが、文化、天保、安政年間に没した先祖については、笠塔婆型であり、通称の他に実名(諱)が刻してあり、通し字の「唯」も判明しました。天領であったためか、天保二年の墓石制限令(台石とも高さ四尺)にも影響されていません。

その他、笠部(屋根)に擬宝珠が置かれ、蓮華台(座)を備えており棹石正面は周囲を額縁状に戒名を刻む「額彫」であり、風化しかけているものの、笠全面に小さな家紋が刻されていきました。

擬宝珠・笠・棹石・蓮華台・台石等の寸法を巻尺で実測し、写真撮影し、可能な限り忠実な復元を試みて父の墓に反映することとしました。先祖の墓との調和に多少とも努めたつもりですが、時代に逆行している

との批判があるかもしれませんが、飽くまでも、墓は眺める物ではなくお参りして初めて目的を達せられるものと考えられます。

人の個性に千差万別があるのと同時に、墓相家によつて吉相形が完全に異なる現状からも、単なる流行や宣伝に支配される必要はなく、いかにして先祖への報恩を表すか、また追慕と感謝の意を捧げて建てた墓塔と対面した時、美しく真心をこめて合掌礼拝できる姿勢が肝要なことと思われまます。

さて、江戸時代後期の先祖の墓を計測して描いた図面と写真を石材店に持参して、何度も交渉し発注に至りましたが、道路から二〇メートル程隔てた山林にある墓苑への墓石搬入路の整備に汗を流しましたが、堆積した腐葉土の除去作業により、その後半年間、アレルギー性鼻炎と戦うことになったのは何という皮肉なことか、我ながら情ない。

棹石の表には真言密教特有の梵字「阿字」の下に夫婦の法号を並記し側面は没年月日・俗名・行年を刻し裏には父の履歴・和歌や書道等の趣味を口語体で簡潔に記しました。刻まれた文字は墨色で、母の戒名二字と実名及び建立者名は慣例に従い朱色に塗りました。

こうして無事完成した父の墓へ毎週末お参りし、掃除しておりますが山間部のため落葉を掃くのも一仕事です。自宅から徒歩五分で行けますが道具の運搬の便を図るため、墓地に物置小屋を自力で建てました。

墓碑建立に際し、当初抱いていた構想も限られた予算を前に、次々と萎えた感を否めませんが、夫婦墓としては愚息の技量を知り尽くしている故人も我慢してくれることと思いません。父の墓と並行して、私の弟(水子ですが)の「吉相」地蔵墓も戒名を戴き開眼法要を営みました。

以上、建墓に係る体験を私見を交えて紹介しましたが、話題が前後し要領を得なかつた点反省しております。石材店については、標準的な既製品でなく、規格を異にした特注品でなく、商売とはいえ快く製作していただき感謝しています。

建墓を無事終えた今、檀那の玄洞山廣山寺の史的発掘も自らの課題と考えており、先祖の供養にもつながると確信します。

神辺町内で国分寺や寒水寺と並ぶ沿革を有し、院家寺(備後四院)や中本寺、十四箇寺独礼等の歴史を持つ廣山寺の縁起について、新たな史実の発見をライフワークとして誓いつつ脱稿します。

近世村落財政ごぼれ話 ―村人にとって一兩とは―

出内博都

福山市千田町にある惣氏八幡社の改築記録「千田惣氏八幡社建立目録」の末尾、正徳六年(一七二六、六月享保に改元)の条に次のような記載がある。

一、八幡平殿建立

但舞殿茂吉園〇引退其節修覆仕候
ここでいう平殿は、拝殿と神殿との間にある幣殿のことで、字義通り幣帛を奉奠するところである。

この後の記録内容を要約すると、「右は古宮の古木を以て建立した。釘、かすがい、瓦、大工等の諸入用の銀子は、江戸長久庵より小判一兩寄進されたので、入用の算用もせず、足利不足の儀もなく、そのため、村中氏子宛の世話もしなかった」というものである。

小さな建物で、しかも、古材を使ったので一兩ですんだ、というだけのことだが、たった一兩で少なくとも一つの建物ができたことは事実である。米遣いの経済といわれる現物貢納体制の時代、お金(貨幣)の魔力は大きかったことを知らされる。落語の講談で、五文、十文のやりくりに四苦八苦する長屋の八つあん・

熊さんの話も聞く。小物成や山数年貢で一匁や二匁の銀にあくせくする庶民のことを思うと、やっぱり一兩の御利益は大きかったと言えよう。

更にこの一兩が、江戸から来たことに驚かされる。名もなき備後の一農村の神社へ江戸から寄進ということになると、そう、ざらにある話ではないだろう。都会へ出て成功した人が郷里へ寄付するという出世物語は近代のこと、この時代にもあったのだろうか。

ただ、この時の藩主阿部正福が大坂城代、次の正右が大坂城代から西丸老中になり幕閣に連なるなど、一年交替の参勤交替をしていなかった。江戸詰が多い藩主なので、藩士・上級領民などの江戸との結び付きは、一年交替で江戸と国許を往復する外様大名領よりは強かったと思える。

正福は寺社奉行もしていたことがある。江戸詰の幕閣大名ともなると、江戸の寺とも関係があり、大名の国許へ寄進ということになったのかもれない。長久庵という寺は何処にあり、どんなにわくのある寺かわからないが、とにかく、あの時代に一兩小判が江戸からこの草深い千田の地に来たという事実には驚かされる。

第六回郷土史講座 福山の古建築 ―建物の観賞の仕方を中心として―

私たち、郷土史に興味を持つ者が、神社・仏閣を訪れて、まず心をひかれるものは、その境内に建つ古建築です。社殿あり、本堂あり、あるいは塔あり、それらは、私たちの心には安らぎを与え、古い時代への憧憬ともあいまって、忘れがたい印象をとどめます。今回の郷土史講座にあたって講師の川崎雅博さんは

「この古建築に対する漠然とした興味、なにはなくあこがれる気持ちを一歩進めて、その建築物にどのような特徴があつて、いつ頃の時代のものか知る手がかりをまとめてみたい。そして、一人でも多くの人が社寺に足を運んでくださり、古建築の素晴らしさを再認識していただきたい」と抱負を語ってくださいました。

〈実施要項〉

日程 六月二十四日(土)
時間 午後一時三〇分
場所 中央公民館会議室
費用 一〇〇円程度
講師 川崎雅博さん
(福山市教育委員会文化課)

第七回郷土史講座 戦国武将入江氏について

「入江氏は「法雲寺寄進状」に「杉原入江」と見えるとおり、地頭杉原氏の系譜を伝える庶家で、神石郡三和町の大石城を本拠とした。

「隠徳太平記」では多くの武将たちが活躍するが、最も強力な武者として登場するのが、入江大蔵大夫正高である。彼はたった一人で大砲を上月城の山頂まで行き揚げたという。にわかに信じ難い話だが、正高が並外れた力持ちであったことは事実である。今回は杉原理興・盛重の家老として活躍したこの正高に焦点をあてて入江氏の興亡の歴史について語ってみたい」

講師の杉原さんは以上のような抱負を語ってくださいました。「山城探訪」が出版された直後、絶好のタイミングでの今回の講座。ぜひご参加下さい。

〈実施要項〉

日程 七月三日(土)
時間 午後一時三〇分
場所 中央公民館会議室
費用 一〇〇円程度
講師 杉原道彦さん
(城郭研究部会副会長)

明治の華

岡本貞子

花冷えの四月の宵、すっかり葉ざくらになった桜の幹を見上げると、かぐわしい若芽の薫りが漂い、空にぼんやり光の暈を被った満月が淡く浮かんでゐる。思いがけない春の夜の神秘さ、深呼吸して大気の中に自分を委ねる。

ふとその天空の中に、先日出会った素晴らしい方を幻に夢見る。

その出会いは四月十六日のバス例会に始まる。例会の度に知る未知の世界への驚き、よろこんで参加している私である。八田原ダム、下津屋十二坊跡、続いて今高野山、石造粟島神社鳥居、古代を伝える素朴な造形と、生命力に畏敬を感じ乍ら敷地を出て、もう一度振り返った右側に苔蒸した石碑があり「多田道子頌徳の碑」という文字が眼に飛び込んだ。とっさに読み取ったお名前が頭を去らない。歩き乍ら吉岡先生を探して、やつと声をかける事が出来た。道すがら概略を伺ったが、勇気を出してお電話番号を伺った。後日、お電話でも丁寧に説明頂き、わざわざ資料も送って頂いたのである。

多田道子女史、明治六年二月生れ、代々甲山の庄屋の多田家に一人娘と

して生まれ、父は正象、当時戸長的重要職にあつた。彼女は幼児より慧敏で、神戸英和女学院、広島師範学校卒業ののち、明治三十年私立裁縫所を開所して子女の教育に尽力なされた。これが甲山高女の前身であり、甲山女学校の創立者である、裁縫所の第一回の卒業生に大妻コタカ先生がいらつしやる。

然し、未だ向学して教育の啓蒙をと念じて上京。心理、家政の二科を終了後、文部省検定試験に及第。滋賀師範、長野県上田高女の教頭を歴任なさった。或る日上田婦人教育会の招きで講演に行く途中、吹雪に遇われて病に仆れ、明治四十年四月十八日遂に天逝なさった。享年実に、花の齡の三十六歳であつた。

女史はお寫真で拝見しても温和なほのぼのとした雰囲気の方で、風雅の嗜みも深く、篤実な面ざしでこちらを見つめていらつしやる。自分の全生涯を人々の教育に捧げようと独身を宣言され、当時、衆議院議長も務められた、親戚でもある三原出身の花井卓蔵氏のご次男を養嗣に迎えられるたという。その頃、女性の地位も低迷し、勉学も不自由な時代に、なぜ命身を賭して教育に伺われたのであろうか。

それは今を遡る八百年の昔、中世より太田庄を持ち、今高野山を拓かせた地力、財力が土壌となつて勝れた先覚者を育てたのではないかと想像される。今、その生家は絶え、眼前には苔蒸した明治四十五年四月建立の佐々木信綱の頌徳碑と、この五十米先の墓地に、東京帝大高橋順次郎教授撰の墓銘、滋賀県の教え子から贈られた石燈籠が、鎮かに立っているのみである。墓守る山つつじの濃いむらさきが、切なく迫ってくる。

生々流轉、されど大きな思想に出会つて、心新たな晩春の夕べを持つ事が出来た。

この文章について、随分吉岡先生のご指導を賜りました。深く御礼申し上げます。

会報原稿募集

「備陽史探訪」66号の原稿を募集します。タイトル・氏名で四行、本文一、二〇行でちょうど一ページです。以下、三一行ごとで一段になります。最大一ページ半まで。字数厳守。66号はページ数を抑えます。掲載は字数を守っている方を優先しますのでご了承下さい。送り先は事務局。締切りは七月十五日(土)。

夏季特別シンポジウム 暴れん坊將軍の実像に迫る

NHK大河ドラマの「吉宗」はミスキヤストではないか、という声が多い中、視聴率ではそこそこの健闘をしています。やはり、吉宗自体の人氣が高いのでしょうか。

しかし、多くのテレビドラマで描かれた吉宗の人物像と江戸幕府中興の祖と謳われた実像とは大きく異なっています。

わたしたちは今回のシンポジウムで、できるだけ真の姿に近い吉宗像を炙り出したいと考えています。

皆様の中で、自分も吉宗について語りたいという方を大歓迎します。ぜひ討論の場に加わって下さい。

事務局にその旨ご連絡下されば、シンポジウムの運営について具体的に説明します。

〈実施要項〉

- 日程 八月六日(日)
- 時間 午後一時三〇分～四時三〇分
- 場所 市民会館会議室
- 費用 三〇〇円程度(資料代)
- パネラー 現在募集中。

田口会長以外は未定。皆様のご応募をお待ちしております。

アマテラス神話成立への疑義
— 持統時代の創作か —

門田幸男

古事記序文を読むと「偽りを削り實を定めて」とある。だが、この言葉は非常に疑わしい。逆に、権力者に都合の良いように改変する、と読むほうが正しいのではないか。

とはいえ、何が古来からの伝承で、何が故意に改変されたものかを見分けるのは難しい。太安萬侶は優れた編集者である。誰にでもすぐわかるような嘘は書くはずがなく、目立たぬ様にうまく組み替えたと思われる。だが、注意して読めば、いくつもの綻びは見つけられるのではないかと。たとえば、私たちが戦時中何とはなしに聞かされてきた「豊葦原の瑞穂の国はこれ吾が子孫の王たるべき地なり」とは、何と図々しい言葉だろう。権力を独占しようとする政治家の執念をあらわにした血が滴るような言葉ではないか。のびのびとした風土記の神話とはまるで異質なものである。

では、改変は誰の指示だったのか。それは、甥の大友皇子を殺して権力の座についた天武であり、その後継者である持統（天武の皇后鸕野）だと私は考えている。持統こそがその

名の如く、己の子孫が皇位を独占する事を古事記に書かせ、その通りに実行した人物なのである。以下、持統の事跡に即して考察する。

まず、持統はわが子、草壁皇子を何としても皇位につけようとする強い意思があった。そのため、草壁の大敵、皇位継承権を持っていた大津皇子（天武と太田皇女の子）を謀反の罪に陥れた。

書紀によれば、持統称制前紀十月に「皇子大津を詛語田の舎に賜死む」とある。罪なくして夫を殺された妃、山辺皇女は、髪を振り乱して夫の下へ素足で走り行き殉死した、という。次は、三輪高市麿による持統の伊勢行幸阻止事件である。

書紀によれば、持統はその六年二月に突然「当に三月三日を以て、伊勢に幸さむ」と言い出す。これに対し、三輪高市麿は「表を上りて敢直言して（中略）諫め争めまつる」が、結局、行幸は強行されてしまう。

いうまでもなく、三輪氏は大物主神を祖神と仰ぐ氏族である。紙面の都合上、証明は省くが、大物主神は元来、初期ヤマト政権、つまり皇室の祖先神であり、三輪氏がその祭祀を担当していたと考えられる。一方、伊勢はアマテラスと同義語

であり、今後は天皇自らそれを祀るといのである。つまりこれは、持統が大物主神を捨ててアマテラス信仰に切り替えることを意味する。これは、後に記すように、皇位継承を念頭においた意図的・政治的な宗教革命だ、と言える。三輪高市麿は危機感と怖れを抱いたに相違なく、その発露としての諫言であった。

第三に、天孫降臨の段では、アミノオシホミミが突然二ニギに降臨の役を譲っている。この話は、草壁が急逝したので、孫の文武に天皇の位を譲った事を反映していると言えるだろう。

第四に、持統時代の宮廷歌人、柿本人麻呂は草壁の死の時、挽歌で「さす日（持統）は照らせれどぬばたまの夜渡る月（草壁）の隠くらく惜しも」と表現しており、持統を太陽即ちアマテラスに当てている点である。

万葉集には他にも天武・持統に対し「大王は神にしませば」と媚びている歌も数首あり、持統即ちアマテラスという認識が広く浸透していたと推定することも可能である。

第五に、書紀の持統四年の即位式の条には「公卿百寮、羅列りてあまねく拝みたてまつりて手を打つ」と

ある。これは古来神事に行う儀式であり、持統を神として仰いでいる。そして最後に、持統の和風諡号は高天原広野姫である。これはまさしくアマテラスを意味するものではないのか。

このように注意深く調べた結果、アマテラス神話は、持統時代に持統の権威を神同様に高める目的で創作された物語である、という結論に私は達した。

この仮説を補強する上で、吉野裕子先生の著作「神々の誕生」が大いに役立った。先生の考え方は、易と陰陽五行思想が古代人に強い影響を与えている、というものである。多くの方はご存じないと思うので、私なりに噛み砕いて以下ご紹介したい。

古事記によると、アマテラスとスサノオは「誓約（ある事柄について祈誓して善悪・吉凶の神意をうかがうこと）」を行った際、八柱の子供（神）を生んでおり、二人は結婚適齢期の男女であることがわかる。

易の思想では、この年齢の男を中男（坎）、女を中女（離）と言い、先天方位ではそれぞれ西（金気）と東（木気）となる。

さてここで、陰陽五行説には「金剋木（金は木に勝つ）の理」という

のがあり、誓約においてスサノオがアマテラスに勝つのは、この理に即してのことである。

また、高天原でアマテラスが散々痛めつけられたのにもかかわらず、腹を立てず許すのは、「木気」の徳が「仁」であるからである。

一方、スサノオが青山を枯山となすほど泣きさいさちるのも、「金気」の性状が「哭くこと」と決められているからであり、同時に「金気」の暴力は「金剋木の理」によって専ら「木気」に対して発揮されるものとされているからである。

さらに、スサノオが妣の国志向なのは、先天方位の母(坤)の位置、即ち北が、後天方位では中男(坎)に変わる易の法則をそのまま写してのことである。

そのうえ、陰陽五行思想の解説書『五行大義』には次のようにある。易離を以て火となし目となす。太陽の位に居り人君の象。左目を以て日となし、右目を以て月となす。東方木気は生命体の肝に通じ、肝は目に通ず。肺を以て金気に配す。肺は金気の精。色白くて剛。鼻の官となす。肺は鼻に通ず。鼻空虚を以て氣を納れ、肺又虚にして氣を受くるなり。

これは目と鼻から生まれた二神の誕生神話にそのまま当てはまる。

古事記序文の天武贊美の段に「二氣(陰陽)の正しきに乗り、五行の序を齊え」とあるので、天武の頃には陰陽五行の思想は知識人には理解され、浸透していたと考えられる。

以上より、易・五行の法則に基づき、持統の意思により創作されたのがアマテラス神話だと言えらると思う。

親子の古墳めぐりに参加して

旭小学校六年生 佐藤奈穂

朝、九時。

いつもと同じ駅のはずなのに、とてもすがすがしくみえる。それは、情景と自分のワクワクする気持ちが、ぴったりあったようだったからだ。

今日は古墳めぐりの日。そう、はずんでかけだしそうなほどだった。

しおりをもらうと、その表紙を見ただけでくわしく知りたくなった。

バスのくる前、早々ときつぷを買って、ゆつくりとバスを待った。

それから二十五分後、ウインドブレーカーのすそにつけた赤いリボンを見ながら、バスに乗った。

四十分ほどして近くの神社から、第一番目の目的地、大坊古墳へ向かった。

た。ここは、横穴式石室という種類に入る古墳だそう。中はひんやりしていて、とても冷たかった。そして外に出て見ると、町が見下ろせる。すごい、とおどろいた。

そして、土もりの見学も終わり、こんどは色々な風景を楽しみながら安光古墳群へ。そこにはカンカン石古墳があつて三人のおじぞう様がやさしく見守って下さっているようだった。それに、少し登ると、たくさん古墳があらわれた。

その後、住宅地確保のためにつぶされてしまった古墳の話聞いて、いよいよお弁当目指して石づち山古墳へ。二つの山のような感じだったので、右側の古墳の頂上まで登ってお弁当を食べた。そして、表紙の写真の話聞いた。なんとその正体はきれいな鏡だった。

最後は猪の子古墳。

その中は、白い色が少し残っていて、きれいに切り石が使つてあつたので、新しい物だと思つた。

その後は、今日の最後の時間を加茂公民館で過ごすことになつて行くうちゆうにさきみだれるレンゲの花が、重くなつた足を軽くなれつとはげましてくれた。そして、公民館に着くと、映像と説明で、くわし

く話を聞いた。

そして、くつたくなつて、バスを待ち、安心して家に帰つた。色々大切な勉強になった。一日中が、とても楽しかった。

ふれあい

後藤匡史

今は昔

備探の会に咲いた

一輪の白百合

その女性は今……

一、花に誘われ

やって来た

想い出巡るあの街は

古の街、坪生の庄

ああ…しあわせラヴ・ロード

二、風に誘われ

やって来た

長い黒髪なびかせて

紅い口唇あいらしい

ああ…しあわせラヴ・ロード

三、恋に誘われ

やって来た

賣男の燈りほしくって

命安らぎ探す旅

ああ…愛しのラヴ・ロード



備陽史ブックレビュー

—これを読めばハワイへ行ける!—

①「神風と悪党の世紀」 海津一朗著

講談社現代新書 六五〇円

中世、特に戦国期をテーマとした小説は多いが、この時期の手軽な歴史書は古代と比較してそれほど多くない。専門書・研究書となると圧倒的に少ない。おそらくあまり売れないためだろう。だから、山川出版社「城と館を掘る・読む」のように、二五〇頁たらず、しかも写真なしで五八〇〇円などという本になってしまっている。あんなに、こんな値段でだれが買いますかいな!

そんな中で、強い味方登場した。南北朝は悪党の時代、新しい視点での再検討を試みる。なんとハレ一彗星まで登場してほんにお買い得。②「縄文人は飲んべえだった」

岩田一平著 朝日文庫 五〇〇円
「週刊朝日」の記者である筆者が誌上に連載したものに加筆して上梓。最近話題となった考古学の発見をテーマに、記者の目で見た興味深い話題を提供している。

中国地方も「鳥取砂丘に埋もれた巨大神殿の謎」「大和が何だ!」古代山陰王国の実力」が登場。この内容でこの値段、よろしおまつせ。

③「韓国の古代文化」 韓炳三著

日本放送協会 五五〇円

NHK人間大学のテキスト。著者は考古学者で前韓国国立中央博物館長。近年の韓国の考古学の成果は目覚ましい。この本では旧石器時代から統一新羅までの発掘成果を図版・写真を交えて紹介。

④「白旗伝説」 松本健一著
新潮社 一七〇〇円

「白旗」は源氏の旗印。それが、いつのころからか「降伏」の意味で使われるようになった。その時期は果たしていつか?埋もれた謎を徹底追跡。阿部正弘も重要な役割を担って登場。そして意外な事実が。

⑤「日本宗教文化の構造と祖型」 山折哲雄著 青土社 二八〇〇円

十五年前、東大出版会から出版された本の復刊。しかし、宗教思想学の第一人者の著述だけあって、所載の論文はどれもまったく色褪せていない。「古代シヤマニズムの習合類型」「中世と骨」「月イメーシの変貌」の各章がとくに面白い。

やや難解なので講談社新書「神と仏」を予習として読んでおくとうい。

⑥「日本おみくじ紀行」 島武史著
日本経済新聞社 一六〇〇円

男がおみくじを引くのは何故か気恥ずかしい。評者も引いたことがあるので、この本で間接体験。

⑦「縄文都市国家の謎」 井沢元彦編
スコラ 一六〇〇円

近ごろ井沢元彦の歴史本がやたら出ている。祥伝社から「言霊」「穢れと茶碗」、廣済堂からは「歴史謎物語」「歴史謎物語」、世界文化社の「日本史再検討」などなど。どれも

悪くいえば、大法螺で中身がスカスカ。学者にはとても言い出せないような新説で人気急上昇だが、正直ハー

ドカパーではあまり買いたくない。ただし、小学館「逆説の日本史」第一巻での提言は評価できる。

⑧「邪馬台国への道」 朝日新聞西部本社編
不知火書房 一五〇〇円

邪馬台国本はそれこそ無数に存在し、コレクターもいるほど。最近、九州説同志の安本美典氏と古田武彦氏の叩き合いも一息ついて、話題不足と思っていたらこの本が出た。

目新しいのは水中考古学を前面に打ち出している点で、「海へ」を第一部に当てている。邪馬台国の存在証明という点では成果は出ていないが、新しい試みとして注目したい。

第三部は、タイトル名となった今年一月のシンポジウムの記録である。佐原真、西谷正、金関恕、高島忠平というビッグネームに交って、最近「古事記」研究に打ち込んでいる

中山千夏が加わっているのが面白い。この本、九州で買うて来ましてん出たばかりやけど、地方出版やさかい、本屋に注文して取り寄せせんらん。かんにんな。

郷土の縄文貝塚遺跡と

橘高武夫先生

小林定市

全国の遺跡史料を読み進め、各遺跡における発見から発掘調査に至る経過に続いて、検出された主要な遺物・遺構が紹介されている。しかし、残念なことに福山地方での発掘報告書は何れも初期遺跡調査記録が欠落していることである。

福山城文書館には、大正時代から昭和にかけて活躍した郷土史研究家の家族から寄贈された資料があり、その内の一部に、沼隈郡教育会研究部部长・藤江小学校校長小川清一氏の、「松永小川家資料」があり、同書には諸貝塚が発見されてから発掘に至る経過が記されていたのである。沼隈郡教育会は、次の括弧書に記すような成果を挙げていた。

一、柳津村馬取貝塚。

「山本新氏が大正十五年（一九二六）に発見報告され、昭和七年一月に実地踏査がなされる。」

二、水呑村字洗谷白浜及浜貝塚。

筆者不詳 「昭和八年（一九三三）七月下旬、橘高武夫氏から、水呑村の北方に近き洗谷の白浜及南方

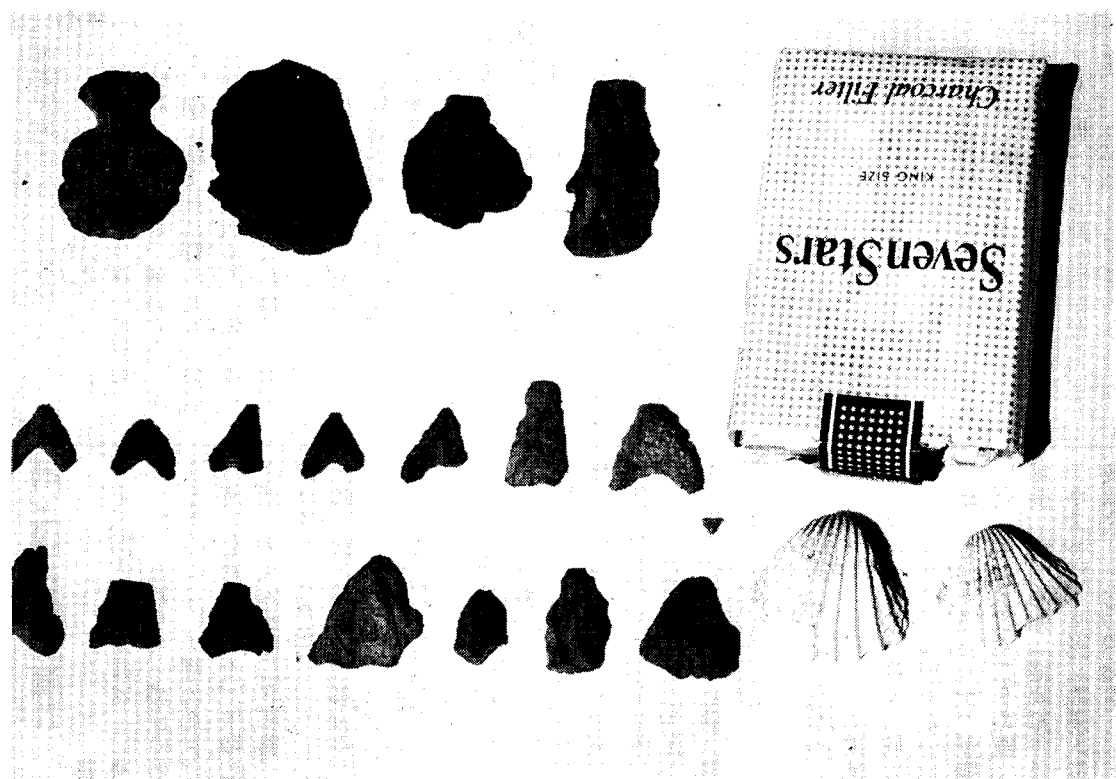
に近き小学校北方の浜に於て貝塚を発見せる旨、次いで小川会長から、三十日・三十一日に之を発掘する旨の通報があり、会員一同会し北村校長（水呑小学校）の厚意により諸準備整う。偶々福山誠之館中学の岡田・花田両教諭並に浜本鶴實氏等と其生徒と共に、此方面の実地研究を遂行せるに邂逅相携へて両貝塚の発掘を行った。」

洗谷貝塚は、熊ヶ峰山系から流れ出る荒尾谷最下流の南面の上丘にある貝塚で、県内に現存する縄文遺跡では最大級のものである。

昭和五年八月、早大の西村教授によつて確認された洗谷古墳貝塚は、白浜貝塚西方約三〇〇m奥の地にあって白浜貝塚とは異なる。

洗谷貝塚が発見されるに至る経過は、大正十五年、輦輕便鉄道線路敷設工事の際、輦輕便妙見駅の東南畑地において相当数の人骨が発掘されたことがあり、昭和八年の発掘には、人骨出土の連続地が調査対象の地に選定される。

誠之館中学では、夏期休暇の課題として、郷土の考古・地理・歴史研究のため百餘名の生徒が、七月三〇



某家所蔵の洗谷貝塚石器（筆者撮影）
石匙、石飾（穴あき）、石刃、石族

日に、教諭と浜本氏に引率され明王院の本堂本尊・五重塔・護摩堂・古墓等調査研究の後、水呑村の貝塚発掘に協力したもので、発掘後、水呑尋常高等小学校橋高武夫訓導(昭和八年四月瀬戸小から水呑小に転任)から、藤江尋常高等小学校校長小川清一氏宛に次の手紙が送られている。

「炎暑の折、校長先生にはさぞ御勞れの御事と存御推察申上ます。

折角御来村御調査に預りしも、何分準備交渉不行届にて、意の如く御出来ならなかつたこと誠に遺憾に思ひますが、何卒御許しの程お陰で貝塚の存在が明になり、村民の注意を喚起致すことが出来まして非常に喜んで居ります。

謹んで深く御礼申上げます。

次に、発掘物は一切小学校に持帰り保管致し居りますれば、入用の際はいつにてもお送り致しますれば御様子下さいませ、猶當日の人夫其の費用の大体を別紙の如く掲げました。委員会の方で出して戴けるものは至急お送り下されば好都合に存じます。

猶経費の關係上水呑村で負担すべき方が都合よきと思れるものは、御面倒乍ら校長先生より北村校長

宛御交渉を願れば幸甚に存じます

が、小生、轉勤以来日の浅く何かと思ふ様に出来ないことを残念に思ひますが、此れも御推量賜つて校長先生に御迷惑でせうが、何分共によろしく御願ひ致します。酷暑の砌何卒御身御大切に、御健勝に渡らせらる様お祈り申上げ御禮傍御依頼申上げます。

敬具

八月一日 橋高武夫

小川校長先生

水呑村字浜貝塚

洗白浜貝塚の南方約二五〇〇mの地にあつて、福山輛港線が県道に指定されたのが明治二四年のこと、同年以降昭和八年に至る迄、道路拡張工事が行われた際、道路敷の東と西から、地表下三〇cmの所に、貝殻と有機土の混合層があり、その混合層から、仰臥伸葬された多数の人骨が出土したことがあり、昭和八年には、人骨出土の連続地の畑を発掘し、一体の人骨が得られたので京大の清野博士に贈呈する。

浜貝塚所在地(昭和一五年地元民の記録)

「建内民治郎氏宅地及菜園、郵便局敷地、伊東清氏宅北半分、水呑巡査派出所、山本文造氏宅の一部

西隣接地。」

三、福山市木之庄町字東中町貝塚「昭和九年十一月、橋高武夫氏から、福山駅より二軒の北方に貝塚を発見した由報告あり、依て委員一行が踏査に向つたのは十一月十七日であつた。

地主中島政一氏の好意により、発掘を快諾されたのみならず、之が諸準備萬端全もによつて整えられ都合よく進行、多大の收穫のあつた事を先ず感謝するものである。」

橋高武夫氏略歴 (一九〇九・三・二〇) 一九九五・三・八)

明治四二年沼隈郡赤坂村大字赤坂に生まれる。

大正一五年福山師範学校本科第一部卒業。

同年赤坂尋常高等小学校訓導、後に瀬戸小・水呑小・神村小を経た後、千年・松永青年学校教諭を命ぜられ、昭和二〇年四月には應召され、昭和二三年本郷中学校校長を命ぜられ、昭和三八年精華中学校校長を退職される。

先生は、自分の功業が四圍の人々から、正当な評価が与えられなくても、何一つ事績を誇示することなく、今年春生涯を終えられた。

第三回古墳講座II

古墳部会

第三回古墳講座IIは「古墳の形について」と題して、墳丘の形の意味するものについて考えます。

日時 七月一日(土)午後七時から

場所 中央公民館2F和室。

資料代 一〇〇円

講師 網本善光(副部会長)

『古事記』を読む

歴史研

第一〇回は天照大神と須佐之男命を中心として学習します。

日時 七月八日(土)午後二時。

場所 中央公民館2F会議室

講師 神谷和孝(名譽会長)

平田憲彦(副部会長)

テキスト代 千円(既購入者不要)

資料代 一〇〇円程度

『備後古城記を読む』

中世を読む会

中世の備後の武將と山城に興味のある方はぜひご参加下さい。

日時 七月一日(土)午後七時。

場所 中央公民館2F和室

座長 出内博都(城郭部会部会長)

テキスト代 千円(既購入者不要)

資料代 一〇〇円程度

備後灘にみる 万葉の旅びと

柿本光明

瀬戸内海は、優しいおふくらだ。あつたかくて大きな懐に抱かれるように、大小三千の島々は海に浮かび長い触手を延ばして入江を困っている。真冬でも積雪を知らず豊饒の海を形成するのだ。

豊饒の海は文化を生み産業を発達させた。古くは遣新羅使人など大陸文化と交流する拠点ともなり、海上交通の要衝であり、瀬戸内の沿岸には往時を偲ぶ「津」「浦」が数多く存在する。

備後灘を往還する船上より眺める大門湾は、いまの福山の東を限る地域で、備後国に入る門戸として、港津が深く入込んでおり、深津高地と大門湾に突き出た引野山塊の東側に古代から海岸沿いに集落があつたのが今の津之下(大門町)と考えられる。蔵王山塊より南に突出する深津高地と引野山塊の間は奈良時代ごろは深く入込んだ湾となり、良き津であつたとつたえられている。

深津湾岸にある浦上は(春日町)と能島(春日町)はともに栄えた地で、浦上の地名は古代港湾としての「浦」の上方に集落が存在したこと

から浦上と称したものと解される。深津市(蔵王町)は古くは海が深く湾入し、現在の蔵王八幡社の麓辺りは良港で、ここから備後国衙(跡地は現府中市)にゆく道が山陽道につながり、いわゆる国府津となつていたのであろう。

路後、深津島山 暫しんじつ君目不見きみめに見えず 若有しるべし

この歌も、このあたりで歌われたロマンスと解されて、大和との交通があつたことを物語っている。蔵王山の南麓に位置する深津は、その名の示すように、深く入込んだ「津」を意味し、蔵王山塊の山麓に良港を形成していたと考えられる。

しかし、この深津島山とは、蔵王山より突き出た蛇山(深津高地)をいうのではなく、深津市(蔵王町)にそびゆる蔵王山を中心とする前後左右の山々を総称していったもので、蛇山もその一部であつたであろう。

海水が今の市村(蔵王町)平野に満ちていた頃は、蛇山のときは、やつとその他の理由もくわえてかく断ずることは、誤りではないと思う。

万葉集の中のこの歌は、柿本人麻呂私歌集に入っている歌である。「しばらくの間も、あなたのお姿

を見なければ、私は心苦しい」という意味の恋歌で、路後は備後のことである。「みちのしり深津島山」の二句はシマの繰り返し音調によつて「しましく」を導く序詞であつて深津にすんでいる人とか、深津の情景を詠じたものではない。しかし、瀬戸内海の美しい島山に囲まれた港町として、「みちのしり深津島山あり」と奈良の都の人たちにも知れ渡つていたものと思われる。

備後灘の海上を船上より深津島山を眺めた作者が、自分に向かつて言った女性のことを思い出して、女性の心になつて歌つたものではないかとおもわれてならない。

この歌は、柿本人麻呂歌集に出てくる一首で、人麻呂の歌かどうかは不明である。ただ人麻呂時代の歌であることは確かである。

万葉集に出てくる山陽沿岸の歌の大部分は、定住者のそれではなく、中央派遣の人々のものである。

難波と太宰府を往還する官吏、妻子をのこして九州へ出向く東国の防人、遠く異国の空に仰ぐ月に、瀬戸内海の島影はどう映つただろうか。

瀬戸内の海はロマンの海であり歴史の海である。その昔、蔵王山の西南麓に発達した集落があつた。今の奈良津・吉津の平地部分は海

であり、良き「津」であつたものと思われる。大和(奈良)からの備後の国府に至る船着き場であつたためか、この地名を奈良津と呼ばれるようになったものといつたえられる。

多島美の瀬戸内海は関門海峡や鳴門海峡など四つの海峡によつて、外海と画された内海に浮かぶ島々の沿岸の景勝地からなつている。それは東西四四〇km、琵琶湖の一四倍の大きさだ。

万葉集巻十五遣新羅使の歌は水島灘から備後灘に移るいわば旅日記風に東から順を追つて編纂者の手によつて配列されたものと推測される。

月読の光を清み 神島の磯間の浦ゆ 舟出する我は

(巻十五・三五九九)

月明かりをたよつて船出する。空は澄み切つて、沖の島々がシルエツトのように見える夜。

昼間、汗のじむとのほうつて変わつて、爽快な涼風が頬をなでるこの感動……。神島はいまどこに。

備中(笠岡市)の神島説、備後(福山市)の神島説が唱えられているが、いまだ決着がついていない。遣新羅使の歌は、必ずしも備後の神島を歌つたものとも考えられず、備中神島から高島、白石島、北木島

と南下し、大飛島の砂洲に碇泊し、韓国の航海の風習となつて前途平穩を祈る嚴肅なる祭祀をおこない、一行は潮流にのつて鞆の浦に向かつたものとも考えられる。

離磯に 立てるむろの木 うたがたも 久しき時を 過ぎにけるか
(巻十五・三六〇〇)

しましくも ひとりありうる ものにあれや 島のむろの木 離れてあるらむ (巻十五・三六〇一)
これらは「舟に乗りて海に入り、路の上にして作る歌」八首の最後の二首である。

吾妹子が 見し鞆の浦の むろの木は 常世にあれど 見し人そなき
(巻三・四四六)

鞆の浦の 磯のむろの木 見むごとく 相見し妹は 忘れぬやも
(巻三・四四七)

前の二首は明らかに鞆の浦の「むろの木」を詠んだ歌とわかる。都びとの間では、大伴旅人がこゝ鞆の浦の「むろの木」をあゝ亡妻を思んで詠んだ悲歌が話題になつていたのであろう。遺新羅使の一行もこれを知らぬ者はいなかつた。

磯に根ばう「むろの木」をひと目見て、特別の面持ちで鞆の浦に着いたことであろう。

ぬばたまの 夜は明けぬらし 玉

の浦に あさりする鶴 鳴き渡るなり (巻十五・三五九九)

玉の浦の 沖つ白玉 拾へれど またそ置きつる 見る人をなみ
(巻十五・三六二八)

万葉時代の玉の浦(尾道市)には白砂に鶴が飛びかき、松の緑は濃く一幅の錦絵を見るような佳景が展開されてきたのだろうか。

玉の浦とはどこだろう。玉の浦については、三つの説がある。その一つは尾道市長江あたり、二つには玉野市玉あたり、三つめは倉敷市玉島あたりとされている。

玉野市玉あたりの説は「備前名所記」の玉浦の項に「児島郡、加茂の庄玉村という南おもてなり」としている。いまも玉、奥玉、玉腹の地名が残つておるが、こゝは万葉時代は児島という大きな島の南側である。

当時の航路を考えるに、東の牛窓あたりから出た船は、往古、本土と児島の間が海であつた、いまの児島湾、児島湖、藤戸の渡しを抜けて水島灘へ出る近道の航路を選んだものと考えられる。

そこで、児島と本土の間の内海を西に出ると倉敷市玉島ということになる。そこで玉島説によると「備中国名勝図絵」の玉浦の項に「然れば本州・玉島を玉浦といひたるゆゑに

今も玉島とはいへるなるべし。又おもふに玉といえるは、もとより地名にて、島なりし故に玉島といひ、其浦をば玉浦といひしか。」という。

尾道説は「芸藩通志」の備後国尾道、古蹟名勝の部「玉浦」の項に、天平八年遺新羅使人の「ぬばたまの夜は明けぬらし……」の歌をあげ、この歌のつぎに神島や鞆の浦の歌があり、遺新羅使船の西航の順でい

ば備前、備中の間とも考えられるので備中の玉島とも考えられるが、歌の順序をみると必ずしも土地の順になつていないから、尾道を詠んでい

るかもしれない。同じ古蹟名勝の部の「宝珠岩」の項によれば、千光寺の俗称、烏帽子岩という巨岩の上に玉があつて夜はこの玉に月明かりがあたり反射して光つていたことから近くの浦を「玉の浦」と呼んだという。この玉は、いつのころか異国人が奪い去つたといわれている。

いろいろの説はあれど、遺新羅使の一行は、夕方ここ長井の浦(現在の三原市糸崎町の港あたり)に着き船泊りした。

備後国水調郡長井浦に船泊せし夜作れる歌三首
青丹よし 奈良の都に 行く人も
がも 草枕 旅行く舟の 泊り
告げむに (巻十五・三六一二)

右の一首 大判官 この大判官とある作者・壬生使王字太麻呂は、従六位上で大使・副使に次ぐ役目をうけていた。

「続日本書紀」によると、大使は阿倍朝臣繼麻呂、副使は大伴宿弥三

中であつた。大使は対馬で亡くなり、副使は病にかかり帰京が遅れたとい

う。海原を 八十島隠り 来ぬれども 奈良の都は 忘れかねつも
(巻十五・三六一三)

鞆の浦からの長井の浦までの海上には島が多く、田島、横島、百島、加島、向島、若子島、因島、宿弥島、細島、佐木島、小佐木島など大小の島が浮かび、その景観のすばらしさは、まさに「八十八島」というにふさわしく、万葉びとの目を見は

らせたにちがいない。帰るさに 妹に見せむに わたつみの 沖の白玉 拾いて行かな
(巻十五・三六一四)

長井の浦の所在地については、糸崎説のほか、尾道説がある。尾道に長江町の町名が残り、尾道の港は長い水路であり長江の名にふさわしいが「浦」の本義からすれば難点だ。

早春のある朝 瀬戸の海を一陣の風が限りなく吹き渡ると、やがて淡い、透明な陽光が

さしはじめ、やわらかな春が来る。海はしつとりと濡れる鱗となって、ゆつたりと漂いはじめ、やわらかな春がくる。

瀬戸内の船旅はひと月にも及んだ。舟底の浅い木船に身を委ね、人力で潮流の変化に抗して進まねばならなかった。遣唐使も、遣新羅使人らも太宰府へ赴く官人や防人も、望郷や妻恋いの情をつのらせながら、みなこの苦勞を味わつたらしい。

しかし、自然は淀みなく流れてゆく、ゆつたり漂い始めた備後灘は醜酔しはじめる。そしてさくらだい、はるあじ、しらうお、たけのこめばるといった瀬戸の顔なじみがあちこちの島影や磯で春の喜びに弾けるのだ。

こうして、瀬戸の海、備後灘に春は満開のときを迎えるのではなからうか……。

時が過ぎ人が移り、なおふるさとの情景だけは今も消えさらずそこに生き続ける。先人たちも往還した瀬戸内に点在する由来ある地に降り立ち、辺りの風景をゆつくりと見まわし、深く息を吸いこみ目を閉じて心を澄し、万葉の時代をよみがえらさそう。

元藤

国見章

加茂川と高屋川が交わるあたりの湿地帯に、人が住みはじめたのはいつごろのことだったろう？

白へビは、ここちよい泥の綿ぶとんにゆつたりとどろろを巻いて、そう考えた。太い胴に小さな頭をちよこんと乗せていると、また眠たくなりそう。陽光が差し込んで透けた菱の葉が広がる水面へ鎌首をもたげ。時折、ぼつんと水紋をひろげながら、紫の花が落ちてくる。

白へビの棲む沼地の端には、大むかしから一本の藤の木があった。藤の木の根元にあるから元藤沼と呼ばれるこの沼は、かつて穴海と呼ばれた内海の名残であると言われている。「大雨洪水ノミギリハ、古ヘノコト思ヒ出ラルル」

と古文書の言うとおり、浅瀬が多くて広大な沼地は、白へビが長ながとした自分の体を気にせず転げまわることができるので、たいへん棲みよい場所だった。

一方人間どもにしてみれば、何枚の田んぼがとれるか、という対象でしかなかったらしい。沼地はある意味で、田んぼがつくりやすい環境にあったからだ。もつとも、幾世代に

もわたる人の命の代償を支払うならば、である。

だが、人というのは我慢強いのか、それともたんに馬鹿なだけなのか、常に貧しい農具をたずさえて、沼の浅瀬に一步をします。白へビの沼にもその足跡は刻まれて、それが随分むかしのことのように思える。

物好きなことよとうたった寝の間に眺めていたら、じき、けつこう住めするように水を抜いてしまったもの。おかげで白へビの棲み家は、いまや小さな沼ひとつばかりになっていく。白へビは、これはしたりと起き上がった。しかし沼から目だけ突き出してあたりを見まわしても、一瞬住み慣れた土地だとはわからなかつた。たくらいの変わりようだった。

一面の葦の原は、それよりもっと背の低い柔らかな植物にとつてかわられていた。整然と区切られた田んぼの間を縫うように走る畦道の脇には、白々しくも祀られた小さな社が、忘れられて朽ちかけている。

藤の木はいまだ残っているとは言葉、生い茂る葦の、風になびくザアラザアラと騒がしい音が聞こえなくなったのは、いかにもさみしい気がする。白へビはむつつりと考え込んだ。

白へビはもう千年ちかく生きてい

るが、むかしから力の加減が下手なところがあつた。水のそとに出るとちよつと動くだけで嵐を巻き起こしてしまふのである。「悪い竜神」と嫌われ、おせっかいな坊主や虚栄の化身のような武士どもに退治されるのはたまらないので、しぜん体の動きはゆつくりになった。それにつられて性格までおっとりしている白へビは、むかしもそうだったがとくに人が増えてきた昨今、めつたに目を覚ましてそとに出ることはなかつたのだ。

そのせいで、このところの文明開化の波にすっかり乗り遅れてしまつたらしい。

さつきから絶えず聞こえている低い振動をうるさく思つて見てみると、沼のすぐ向こうで鉄のかたまりが、沼の水をどんだん吸い上げていく。はるか向こうまでうねうね延びている用水路に、その水は注がれている。これを見れば、いくら万事がのんびり型の白へビにでも、

「人間ども、早晚こども干拓する気だな」

ということはずぐに想像がつく。つくにはついたが、さて問題はこれからどうするか、だ。このように人間どもがのさばっているご時世では、ここ以上に住みやすいかわりの

沼があるとは思えない。

一方、ここ数日人間どもを見てみると、神への畏怖とか敬いといった心持ちからは、はるかに遠ざかっているようである。朽ちかけた杜からもそれはわかる。けしからん！といて腹をたてるのがふつうなのだろうが、いまはそれで都合がよかった。自分たちにやさしい神さえ捨ててしまった人間どもは、災いをもたらす神をも忘れかけているに違いないからだ。

ここはひとつ、本来の居住権を高らかに宣言して天に駆けのぼり、人間どもがこつこつ築いてきた田んぼや灌漑設備を水と泥で押し流してしまふのがいい。「悪い竜神」を信じない人間どもは、沼の主である白へびを退治しようなどと考えつきもしないに違いない。

そうだ、そうするのがいちばん手っ取り早くて、棲み家に土足で踏み込まれた白へびの気も暗れるのである。

そこでさつそく、白へびは沼のそとへ勢いよく跳ねあがった。

盛りがすぎて、藤の花も散りかけなので心は痛まない。だがせめて、散りはじめた花に興を添えてやろうと思ひ、竜巻ののせて人間どもの頭の上に、雨といっしょに降らしてや

った。

しかし人間どもは、白へびの風流がわからないぐらいのあわてようだった。だからといって、それに対して、白へびが文句を言う筋合いでもあるまい。ただでさえ抑えのきかない強大な力を、今日こそとばかり、存分にとき放つたのは白へび自身なのだから。

白へびの記憶にあつたとおりの一面の湿地に戻すには、そんなに苦労はいらない。尾っぽを一振り、頭を一巡りさせただけで、沼の水とおなじいろをした厚い雲が激しい雨と風とを包んで垂れ込めた。

稲妻で走りながら見下ろすと、蓑を着込んだ人間どもが堤や水路を見回ようすがおろかである。力のない人間ども！

しかしなんだって、こんな生きものが、深山を切り開かねば間に合わぬほどに増えることができたのだらう？

ほら、たつたひとつ水門が破れただけで、あとはあんなにももろい。人間どもが押し込めたはずの沼の水は溢れだし、人も小屋も田んぼもさらった。

これでよし、と満足して沼へかえった翌日。白へびが小雨の落ちる水面に顔を出すと、見渡すかぎりもと

の湿地にもどつていた。藤の木が一本、むかしながらの孤高を保つて揺れている。見る影もない田んぼの跡に生き残りの人間どもが戻ってきて、ぼうぜんとして立ちつくすなりがっくり肩を落としてしゃがみこむなりしている。

その風景に白へびは満足したが、ここはもう一押しというので、尾っぽを一振りして追い打ちの雨を三、四日も降らせたものだ。花のあとで、青あおと葉を繁らせはじめた藤の木だけが、身をふるわせて喜んでいた。

百何十年かぶりで長ながとのびた白へびは、取り戻した静けさに、満足だった。あの葎のざわめきはまだまだ遠いが、今度の夏がすぎる頃にはきつともとに戻っている。

水面のほうで聞こえるばちやつばちやつという音は、水鳥たちが水に降りたのに違いない。そうだ。鴨たちがおしやべりを始めている。白鷺の長い足が渡ってゆく。ぽちよんとカイツブリが顔をのぞかせて、人間どもが植えていた柔らかい草を引っこ抜き、あわてて水の上へ戻っていた。ぽつん、と微かな音がして、白へびの力をもつても散らせることのならなかった藤の花がひとつ、落ちてきた。

いやあ、気持ちがいい！

これで自分、人間どももおとなしくしてしてくれるだろう。白へびはすっかりくつろいで、寝につくつもりでとぐろを巻き、目をつぶった。

その時である。ドボン、という耳障りな醜い水音がした。白へびはムツとして、目を開けた。

今度はなんだ？
目の前をなにか大きなものが沈んでいく。
くさい！ツンと鼻につく臭いがする。

よく晴れた今日、きつい日差しが沼の底まで光の筋をとどけている。やわらかな泥でけむった向こうを透かし見ると、黒い毛の束がひとかたまり、からみあいもつれあつて落ちていく。小魚の群れが、向こうからやつてきた。先頭の一匹が黒い毛のかたまりに触れ、群れは驚いたように向きを変えた。その勢いで水に流れができた。その流れが黒い毛のかたまりを押しやった。振りのついたそれがぐるん、と一回転したのを見るとき：

縊びられて、白目を剥いた若い女の顔があらわれた。

白へびは顔をしかめた。女の顔と裸にむかされた体は白へびのそれより

もつとなま白く見え、突き出した舌の赤みが気味悪げだった。

くさいのは、女の垂れ流した糞尿である。白へびはあきればてて、水面を見上げた。

なんとおろかしい人間どもは、神祇りの方法を忘れたかわり、「いけにえ」という野蠻で迷惑しごくな業を記憶の奥底から引つ張り出してきたらしい。

藤の木の根元で、書かれたものを読みあげるだけの、心のこもらない祝詞があとに続く。

白へびはうるさくてしかたがないので、とぐろを巻いたなかに首をしつかり突つ込んでむりやり目をつぶった。

それで祝詞の声は聞こえなくなつたが、こんどはなにやら低い振動が水を伝つて頭に響いてくる。気になつてよくよく頭を澄ませてみると、「うちやあしにたくなかつた。なんでこんなめにあわにやあならんのかむらにむすめはぎょうさんおる。なのになしてうちなんか。いまにもくめさんとしゅうげんあげられたのにおつたのほうがちよりきれいなあいつもくめさんにしゅうしんじやつた。うちをやつかいばらいにしたんじやろうか。あいつはむらおさのむすめじゃけえ。いちばんになげこ

まれにやあならんはずじゃ。うらめしい。しにたくな。しにたくなかつた」

言つてもしかたのない恨みごとを、このドザエモンは死んでからもくどくどと言いたてているのである。

白へびは、頭を抱えた。この声ともつかない声は、なまじ大きなものでないだけに、頭のすみにひっかかつて離れてくれない。つぶつぶ、つぶつぶと貝があわを吹くような声は、白へびが眠ろうとしかけると、突然頭のなかに鮮明に響いてくる。

「しにたくなかつた。しにたくなかつた」
それはそうだろう。沼の主——つまり白へびの機嫌をとるために殺されて水に投げ込まれるのが、嫁ぐ日を持つていた娘の本意であるはずがない。

娘の死体はじき膨れあがつて、浮いて流れていった。しかし魂のほうは沼の底にへばりついて、貝のようにつぶつぶとくりかえすのである。「しにたくなかつた。しにたくなかつた」

白へびも、そんな娘を少しはあわれに思わないこともない。
だが、それにしてもうるさいのである。死人にやすむ間はいらない。

白へびにも眠りは必要なかつたが、泥の綿ぶとんのなかでとろとろまどろんでいのがなにより好きな白へびは、参つた。

ついにある時、白へびはなにぶんにも辛抱できかねて沼を飛び出した。大きく体をうねらせて雲の上まで駆けのぼると、そこでやつと落ち着いてひと眠りすることができたのである。その間、下界が大雨だったことは言うまでもない。

白へびが満足して沼に帰つてきてみると、それまで暗れつづきで水がひきかけていたところも、また元の木阿弥になつていた。藤の木だけが、いよいよ元気に蔓ひげを延ばしつづけている。

沼に沈んだ白へびは、そのころにはなんとか娘の魂と共存せねばという気持ちになつていた。なるべくつぶつぶに慣れようと、ひたいにしわを寄せつつ試みる。

その矢先に、またしてもドブンという醜い音である。

ドキドキしながらそちらを見ると、二人目の「いけにえ」だった。「うまくいったはずなのに。あいつをせつかくやつかいばらいできたのに。くめさんといっしょになれるとおもつたのに。むらおさのむすめをいちばんにやらんかつたからまたお

おあめがふつたなんて。そんなばかなことがあるものか。ほかにむすめはようけおるのに。いやじやいやじや。うちはしあわせになるんじや。しにたくな。しにたくなかつた」

白へびはうんざりだった。新しく投げ込まれた娘の体は、引きつけられるように最初の娘が沈んだ場所に落ちてゆき、二人して

「しにたくなかつた。しにたくなかつた」
と言いたてた。

じきに互いの存在に気付き、「おまえがさきになげこまれとりやあ。うちはしなずにすんだんじや」

「おまえがぬまのぬしのきげんをうまくとつとりやあ。わしはなげこまれんですんだんじや」
とおめき合うにいたつては……

白へびは、また次のが投げ込まれても迷惑なので、そとに出ることもできない。

「おまえのせいじや」
「おまえがわるい」
と、低くつぶつぶののしる暗さ！
「気が狂いそうだ」
棲み家の沼さえ壊しかねないほどに、白へびは激しくのたうちまわつ

た。三たび沼は荒れ狂い、人間ども
の嘆く声をかき消した。

だがその時、思わぬ天与の手がさ
しのべられたものである。

「おまえの沼が、人間どもに干拓さ
れはじめたと聞く。わたしの裁量で
きる場所にすこし余裕があるから、
よかつたら頼ってきなさい」

と、夜又ヶ池の姐さんが言つてよ
こしてくれたのだ。

渡りに船とはこのことだ。白へび
に船はいらないけれど、この際そん
なヒネくれたことは言つてられない。
ありがたく姐さんの世話を受けるこ
とにした。

思えば、この沼を去りたくなくて
一暴れしたのである。それが今の状
態を招いたからといって、なにもし
なければよかつたというわけではな
い。あの時なにもしなければ、いず
れ人間どもに干拓されて、沼はなくな
つていた。

これからどうすればいいんだらう
？

白へびは、心細くそう考えた。
どうやつても、この古巣に残るこ
とはできないらしい。かといつて、
夜又ヶ池の姐さんをいつまでも頼つ
つてゐるわけにもいまい。白へび
のように棲み家を追われたモノたち
はたくさんいて、きつとゴマンと姐

さんを頼つて来るに違いないのだ。
自分はどうなるのかしら？

この沼が消滅する時、生きももの
たち——フナやタガメ、ヤゴたちは、
運命を共にするだろう。アメンボみ
たいに羽があるやつは、人間どもと
折り合いながら、それなりに命をつ
ないでいくことができるかもしれない。

では、白へびはいったいどちらの
側に立つことになるのか？

滅びるのか。生きるのか。
もちろん、生きていたい。でもこ
の沼を追い出されて、生きていける
のだろうか？

白へびはうつむき、涙をひとつぶ
落とした。それは沼の水に溶けるこ
となく、ぼとりと落ちて、水底の軽
い泥に紋を描いた。涙線形のそれは、
水晶から成っていた。

「いきっていたかった」
「いきっていたかった」

二人の娘のつぶやきが、いつの間
にかそう聞こえはじめた。

そう、だれもが生きていたい。で
もあの娘たちがそうだったように、
ひとつの村が生き残るためには「い
けにえ」が、いつでも求められるの
である。

それじゃあ、と白へびは考えた。
じぶんもだれかの「いけにえ」に

なるのかしら：
そんなのはいやだ！

だれかの幸せのために、自分が滅
びてしまわなくてはならないなんて、
まっぴらだ。たとえだれのためでも
——ましてやそれが、自分を故郷の
沼から追い出そうとしている人間ど
もの幸せならばなおさら。

ふと白へびは、自分を呼ぶ声に気
付いて顔を上げた。沼の上空で、夜
又ヶ池の使いが待っている。

白へびは、名残惜しげにゆっくり
と、迎への使いを追つて天へ昇つた。
雨は、あいかわらず激しい。

「いきっていたかった」
「いきっていたかった」

そうつぶやく娘たちの身の上が急
に自分に重なって見えて、白へびは、
身を震わせる思いで振り返らずには
いられなかつた。

激しく吹きつける風に、見るから
に弱よわしい藤の枝が逆らうことな
くなびいている。この藤の木だけは、
美しい見目のおかげで、沼がすべて
田んぼになつても残つてゐるだろう。
横暴な風に逆らうことなく、巻きひ
げを好きなだけ翻らせてゐる柔らか
な樹木は、ときに杉の巨木に巻きつ
いて締め殺す、攻撃性も持ちあわ
せてゐる。

美しい花…人も獣も変化のモノす

ら魅きつけてやまない藤の、それが
生き方、生き残り方だ。もしかした
ら白へびは、藤の花のようになれば
いいのかもしれない。

蓑を着込んだ人間どもが、薦にく
るんだ長いものを白へびの沼に投げ
込もうとしている。白へびはおぞま
しさにおののきながら、顔をそむけ
て故郷の沼をあとにした。

それは、三人めの「いけにえ」に
違いないのだ。

散り残つた藤の花が、死んだ女と
飛び去る白へびを、木の上からじつ
と見ている——

『何でも質問箱』質問募集

今回は質問がなかつた！
「しゃあ怒つとる！」

なーんで質問が来んのじゃ？せつ
かく編集部がええ企画を立てとるの
に、肝心の質問が来んとはどういう
ことならー。わしやーの、回答者に
なりとうてウズウズしとるんじゃ。
ええか！次回の『質問箱』はせつて
やーやるけえーの。ぎよーさん質問
を送つてくれーや。頼むで、な！
☆質問はハガキに書いて、事務局ま
でお送り下さい。ハガキ一枚につ
き一つの質問でお願いします。

集え！古墳測量調査 はたして掛迫六号古墳は

前方後円墳か—
古墳研究部会 山口哲晶

「福山市史」に前方後円墳として紹介されている「掛迫六号古墳」は、芦田川流域を代表する中期古墳で、竪穴式石室を二基持ち、夕龍鏡、仿製三角縁神獸鏡を出土しています。

前方後円墳ならば、全長四六・五m後円部径二七・五mのこの古墳、実は墳形の確定には未だ至っていないのです。現在、前方後円墳・円墳の両説があり、研究者を悩ます原因ともなっています。あえて「前方後円墳ならば」と記した所以です。

このたび、わが古墳研究部会は、総力をあげてこの古墳の測量調査を実施し、論争に終止符を打とうと決意致しました。そしてやるからには、先にわれわれが手がけ、近藤義郎編「前方後円墳集成」にも掲載された「正福寺裏山古墳」同様、質の高い測量調査をしたいと考えております。

そこで、会員の皆様の中から調査にご協力下さる方を募集致します。ともに汗を流し、ともに苦労したあと、完成した測量図を前に喜びの乾杯をしようではありませんか。

次に、今後の予定を記します。

①地権者の承諾を得る (早急に)。
②掛迫六号古墳および古墳測量調査についての講習会 (近々、未定)。

③夏期に下調査・準備。
④九月、十月から樹木の伐採。

⑤年末から測量調査開始。
力を貸して下さる方は、古墳部会の山口(〇八四九-四五六一七三)または事務局までご一報下さい。詳しい内容のご説明を致します。会員の皆様のご支援をせつにお願い申し上げます。

七月バス例会

ある晴れた日の勝山は
森の中にたたずむ
—歴史と民芸を味わう旅—

美作国勝山町を探訪します。今回の例会は趣向を凝らして歴史だけでなく、民芸の楽しさも取り入れました。また、旅の楽しみのひとつは美味しいものを食べる。初の試みとして、希望者には、勝山の味の名所「西蔵」でのお食事を用意しました。出雲街道の町並みを散策し、豊かな緑と歴史を味わいたいものです。

①高岡神社

孝靈天皇を主祭神と祀る神社。参道に聳える大鳥居は最上稲荷に次ぐ大きさ。出雲式の狛犬も珍しい。

②大谷一号墳

昨年、秋の古墳めぐりで探訪の際には未完成。この度、史跡整備が竣工し、五月一日に記念シンポジウムが開催されたばかり。その際、近藤義郎先生は「被葬者吉備太宰説」を発表。墳丘は完全復原され、面目を一新。再度見学の価値は十分。他に類例のないすばらしい古墳で、昨秋見逃した方は絶好のチャンス。

③勝山町郷土資料館

三浦藩二万三千石の歴史を中心に展示。勝山は谷崎潤一郎ゆかりの地でもあり、その書簡も展示。お茶のサービスもあつてくつろげる。

④町並み保存地区の散策

⑤高瀬舟発着場
⑥造り酒屋「御前酒」
勝山は名水の地。当然美味しいお酒ができる。酒造行程だけでなく、見事な庭園も見学。もしかすると聞き酒のサービスがあるかも？

⑦武家屋敷館(渡辺邸)

一六〇石の家老格渡辺家。なんと！この座敷で食事をとらせて頂く。

⑧城山(中世)散策と三浦家墓所

本丸は時間的に無理。出丸(墓所裏山、太鼓山)に登って遺構を見学。

⑨毎来寺

久世町にある曹洞宗寺院。知る人ぞ知る板画(版画)の寺。まるで美術館のような本堂はすばらしい。住職の岩垣正道師は六月一四日から岡山天満屋で、同二一日から福山の「展ギャラリー」で個展を開く。

⑩美 施 要 項

講師 神谷和孝氏、平田憲彦氏。
日程 七月一六日(日)雨天決行。
集合時刻 午前七時四五分
集合場所 福山駅北口「福山キャッスルホテル」前
参加費用 会員 四〇〇〇円
一般 四三〇〇円
申込み開始日 六月一九日(月)
☆「西蔵」での食事(二二六六円)
☆西蔵」での食事(二二六六円)
☆普通参加は電話でOKです。
☆普通参加は電話でOKです。
☆普通参加は電話でOKです。
☆普通参加は電話でOKです。

海の一家

後藤匡史

家の母ちゃん

云うことには

父ちゃん仕事を船長で

息子は云うこと機関長

娘はデートに行つタンカー

だから私は航海(後悔)する

わかるかな!!

新入会者紹介

前回以後、次の方々が新しく入会されましたのでご紹介します。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

事務局日誌

三月二六日(日) 第三回郷土史講座

「備後国太田荘を巡る戦い」会場は超満員。講師田口会長。のりにつけて熱弁ふるう。参加四七名。

四月一日(土) 古墳講座Ⅱスタート

親と子の古墳巡りの予習「古墳学習のガイドランス」参加一五名。

四月八日(土) 第七回「古事記」を

読む。引き続き伊那那岐神・伊那那神美について学ぶ。参加二六名。

☆終了後、会報64号の発送作業。

四月九日(日) 古墳巡り下見。残念

ながら雨にたたられ中止。花見は福山城月見櫓で実施。参加一五名。

四月一五日(土) 「備後古城記」を

読む。参加一七名。

四月一六日(日) バス例会「今高野

山に春霞たなびく」講師田口会長、蔵橋先生。参加六二名(三名現地)。

四月二二日(土) 第四回郷土史講座

「文献からみた古代の戦い」講師は七森義人事務局長。参加三六名。

☆終了後、小中学校へ「親と子の古墳巡り」の案内状の発送作業。

五月二日(火) 役員会。参加一〇名。

「親と子の古墳巡り」と記念行事の打ち合わせを行う。

五月五日(金) 第13回親と子の古墳

巡り。神辺町中条→加茂町コースを歩く。前日までの雨がやみ、快晴。大成功！参加約一三〇名。

五月二三日(土) 第七回「古事記」

を読む。「神々の生成」の章を学ぶ。神名の羅列でやや飽きる。門

田氏が飛入り講師に。参加二八名。

このとき上田幸子さん、喜多村允子さんが入会。

五月二〇日(土) 午後一時三〇分、

第五回郷土史講座「万葉と瀬戸の旅人」市民会館会議室にて。講師

は平田恵彦歴史研副部長。船舶史と瀬戸の港について。参加二八名。このとき門田幸男さん入会。

☆午後七時より「備後古城記を読む」

於市民会館会議室。参加一七名。

五月二三日(火) 午後七時、一五周

年記念行事の最終打ち合わせ。参加一〇名。於福山ワシントンホテル。

五月二七日(土) 午後二時。

いよいよ一五周年記念行事開始。記念講演会は広島県立博物館講堂。

講師中井均先生。演題「考古学から見た中世城館」とくに戦国時代を中心とした城館の実像を探る」

参加約二二〇名。先生のパワフルな講演に圧倒される。アツという間の二時間だった。

このとき、岡田道章さん、木下和司さん入会。

☆午後六時、記念祝賀会。詳細は一頁参照のこと。

『山城志』原稿募集

「山城志」第13集の原稿を引き続き募集します。四〇〇字詰原稿用紙で最大五〇枚まで。ワープロ原稿はタテ三三文字×二行で三〇枚まで。朗報が一つ、中井均先生が寄稿して下さること。

いま集まっている会員の原稿はわずか一本。これじゃ出たくても出せません。締切りを八月末日まで延ばすからみんな原稿書いてちょうだいネ。送り先は事務局です。

備陽史探訪の会

創立一五周年記念行事報告

五月三日(火) 晴れ。

☆午後七時、スタッフ最終打ち合わせ。於福山ワシントンホテル。

五月二六日(金) 曇りのち晴れ。

☆午後八時、講師中井均先生来福。会長、駅に迎え。打ち合わせ後、先生はワシントンホテルに宿泊。

五月二七日(土) これ以上ない快晴。

☆午前九時、杉原道彦城郭副部長、中井先生を迎えにホテルへ。その後、中村副会長、国見さんとともに神辺城跡、要害山城跡を案内。

☆午後一二時四五分、岩本所長の招待で、昼食会。中井先生とともに神谷名譽会長、田口会長が出席。

☆午後一時、広島県立歴史博物館講堂にスタッフ集合。準備開始。

☆午後二時、記念講演会開始。演題「考古学から見た中世城館」

冒頭、岩本正二草戸千軒町遺跡調査研究所所長と田口会長が挨拶し、講演後に神谷名譽会長が挨拶。

最後に福島正文氏が行事案内。司会は平田恵彦歴史研副部長。

聴衆、約二二〇名。

☆午後四時、講演終了。大成功!

「山城探訪」四二冊販売。

一五周年記念祝賀会報告

☆会場「福山ワシントンホテル 五月の間」

☆午後四時四〇分、スタッフ集合。

記念品「山城探訪」配布準備など。

☆午後五時一五分、受付開始。

☆午後五時三〇分、駅北口から記念祝賀会会場への送迎バス出発。

☆午後六時、開会。七六名出席。

式次第

一、開会の辞(司会)

二、挨拶(田口義之会長)

三、来賓祝辞

門田峻徳氏、上杉博美氏、岩本正二氏より賜る。

四、来賓紹介(司会)

五、御祝儀等披露(七森事務局長)

六、表彰および記念品の贈呈

末森清司氏、山口哲晶氏、後藤匡史氏、種本実氏、篠原芳秀氏、熊谷操子さんの各氏へ。

七、乾杯(音頭 中井均氏)

八、歓談

九、スライド上映(備陽史探訪の会の歩み。解説、網本善光氏)

一〇、余興

日舞(鈴木幸子さん)

手品(杉原外志子さん)

カラオケ(斎藤氏など多数)

一一、「山城探訪」出版に寄せて(出内博都氏、塩出拓路氏)

一二、挨拶(中村勤史副会長)

☆司会 山口哲晶氏、佐藤秀子さん

☆来賓御芳名(五十音順)

・石井耕二氏

・(福山商工会議所総務部長)

・岩本正二氏

・(草戸千軒町遺跡調査研究所所長)

・上杉博美氏

・(福山商工会議所副会頭)

・ト部正道氏

・(RCC取締役福山支局長)

に集い、中井先生を囲んで歴史談義。大いに盛り上がる。

五月二八日(日) 薄曇り。夜から雨

有志により、中井先生を山城へご案内する。まず相方城へ登る。見事な石垣は比較的新しい形式。しかし、偶然見つかった瓦は「弧挽のA」という古いもの。中井先生も頭をかかえる。解決編は先生が

「山城志」に寄稿して下さるとの事。その後、新市町立歴史民俗資料館へ。相方城出土瓦などを見学する。昼食後、一乗山城に。大堀切に中井先生驚愕。四連続の堀切は初めて御覧になったそうだ。石垣にも当惑の色が。備後の山城はやや近畿の常識に合わないようである。

午後五時、先生を駅までお送りする。ほんとうに名残惜しかった。

この秋、近江一泊旅行での再開を約して別れる。再見!再見!

☆素晴らしい三日間だった。

天候も備陽史探訪の会の味方だった。中井先生が来福される前日まで雨。しかし、金曜日には止み、祝賀行事当日はまさに雲ひとつ無い日本晴れ。日曜日は、先生が帰られたとたん夜から雨。一五周年を祝う我々の気持ちがあ天に通じたのだ。次はいよいよ二〇周年!

「山城探訪」発刊!

備陽史探訪の会創立一五周年記念出版、待望の「山城探訪」福山周辺の山城三〇選―が、記念行事の当日ついに上梓されました。

一昨年から出版計画を練って準備を進め、昨年初頭から測量調査を実施、図面の作成、原稿の執筆、そして印刷・校正。足かけ二年にわたる大プロジェクトでした。

いままで福山市近隣の中世山城に関するまとまった本がなかっただけに、この本の出版には深い意義があると自負しております。

「山城探訪」は備南の代表的な山城を網羅し、その上初心者のために「山城の歩き方のガイド」「山城関係用語解説」等も掲載。どうか手にとって読んでやってください。私たちのかわいい子供なのですから。

会員の皆様には頒布価格一〇〇〇円(一般書店は一五〇〇円で販売)でお分けします。会の行事で販売しますし、郵送もします。郵送ご希望の方は、代金と切手三二〇円ぶんを同封の上、封書でお申し込み下さい。会員の方には、なるべく一部、購入していただけたらと思っております。なお、山城調査に協力いただいた方には無料で一部贈呈します。

近江・越前一泊旅行参加者募集

―秋天に戦国の残光を求めて―
この秋の一泊旅行のコースが決定しました。今回は戦国時代にテーマを絞って、探訪する史跡を厳選し、じっくりと見学します。

①姉川古戦場

信長と長政の決戦の場。死闘四時間、死者二五〇〇人。姉川は真紅に染まったといえます。

②小谷城址(国史跡)

浅井氏の居城小谷城は、姉川と高時川に囲まれた、北国街道を睨む戦略上の要衝にあります。

山城の遺構は小谷山のほぼ全域にわたり、その曲輪の数、一一〇〇!山城ファンにはこたえられない面白さ。お市の方がどのように暮らしていたか想像してみるのも一興です。

③多賀大社

伊邪那岐神が鎮った日本最古の神社のひとつです。秀吉も願かけた延命長寿の神様として特に有名。重層入母屋造の本殿は荘厳。また、境内にある俊乗坊重源の寿命石に触れば、長生きが叶うといえます。

戦国期は武將の興亡の渦に巻き込まれて苦闘。しかし、見事に生き残って、信長など有名武將の古文書を数多く今に伝えます。

④国宝 彦根城

国宝天守閣を始めとして、天秤櫓、太鼓門、西の丸三重櫓、馬屋(各重文)など多くの遺構が残ります。また、国名勝の庭園、玄宮園はすばらしく、井伊直弼が青春時代をおくった埋木舎など見どころ多数。

⑤越前朝倉氏一乗谷遺跡

息をのむ遺跡というのはめったにありません。が、この朝倉氏一乗谷遺跡こそまさにそれ。

考古学の成果により見事に甦った中世城下町。まるで五百年時を遡ったような錯覚にとらわれます。つべこべいうより見るが勝ち。見学前には資料館に立ち寄って予習します。

⑥滝滝寺徳源院

近江源氏佐々木京極氏の墓所。静かなたたずまいのなか整然と並ぶ三十数基の宝篋印塔は壮観。婆娑羅大名佐々木高氏のものなど、上段一八基は形式変遷を明瞭に表しており、正に宝篋印塔の博物館といえます。☆余裕があれば、蓮華寺、氣比大社、北畠具平の墓等にも寄ります。

☆雨天の場合は、危険防止のため小谷城に登るのは中止し、代わりに安土城歴史考古博物館や他の史跡巡りを致します。ご了承下さい。☆宿泊は琵琶湖湖畔の彦根簡易保険保養センター。宴会は盛大に!

〈実施要項〉

日程 一〇月一四、一五(土日)

雨天決行。

集合時刻 午前六時四五分(厳守)

☆福山発 七時二〇分新幹線乗車。

集合場所 福山駅南口「釣人の像」

参加費用 会員 四五〇〇円

一般 四六〇〇円

☆新幹線使用での料金ご理解下さい。

募集人数 四五名限定

注意 小谷城に登るので必ず山歩き

の出来る格好で参加の事。

受付開始 六月一九日(月)

☆ハガキまたは電話でお申し込み下さい。

☆詳しい要項をお送りします。

編集後記

☆会報では初めて小説を掲載。

これをきっかけに、どんどん小説

の投稿があるといいですね。

☆今回は記念号で大增ページ。次号

は緊縮ページになるので、字数制

限を必ず守って下さい。そうしな

いと掲載出来ない場合があります。

☆二〇ページを越えると、九〇円で

送るために表書きが手書き、切手

なし、スタンプになります。けっ

こう大変なのよ。(磐座亭主人)

備陽史探訪の会事務局 〒七二〇

福山市多治米町五一九―八

☎〇八四九(五三)六一五七